資料３

世田谷区地域経済の持続可能な発展を目指す会議
第２回勉強会　議事要旨

日時：令和５年７月２０日（木）　１８時００分～２０時３０分
場所：世田谷区役所三軒茶屋分庁舎３階　教室

■　出席者
〈会場出席者〉
長山会長、城田委員、竹内委員、中山（耕）委員、市川委員、吉田(亮)委員
〈オンライン出席者〉
児玉委員

■　主な意見
- 事業者が安心して継続的に事業が営む、引き継ぐという具体的課題が分かりにくい。
- 区民の生活を支える地域の産業は時代ごとに変わる。生活が変わることによって産業も変わる。入れ替わった方がいい部分もあるのではないか。
- 安心して継続的に事業が営まれることや、産業が引き継がれていくことが街にとって大事なことなのか。「目指す姿」なのか疑問もある。
- 地域で活動する事業者が増えていくこと、応援することが大事ではないか。クラウドファンディングのような応援の仕方や、世田谷区に住んでいる人が投資をするという活動も可能になってきている。頑張ろうとする事業者を応援する機運やカルチャーが世田谷区に生まれていくといいのではないか。
- チャレンジできるということは大事だが、その裏には応援をしてくれる人が街にいるからできるというような、応援する人の視点が目指す姿に入るとよい。これらの取組を増やすことが結果的に経済が発展していくことに繋がるのではないか。富裕層の資金をチャレンジする人に循環させるイメージ。
- 公共の役割として、セーフティネットというのは要。補助金が取れない人はしょうがないという話があったが、しょうがないではいけないのではないか。広報の在り方やアクセスができるよう公共が行わなければならない。それが公共の役割。最後の砦。
- 世田谷の政策としては、誰も取り残さないということは、 住民もそうだが事業者もそうではないか。
- 困窮している小規模事業者も含めて、区民の生活を支えている。それを

区民が支えないわけにはいかない。チャレンジの話は基本的方針２や３ではないか。

- 生活産業を中心に、考えていくスタンスは変わらない。生産性をよりあげていくためには、情報通信業とのコラボレーションがあるといいのではないか。新しい産業分野を戦略的に提示したり特定することもいいが、難しい。
- 世田谷が掲げる新しい産業分野を明示することは意義がある。それが行政が支援する産業なんだというのがあってもいい。
- 「支援産業」のようなものがあった方がいいという考えがあってもいい。支援産業がビジネスになりやすいのは都市型産業の特徴。世田谷にはシニア含めて、経験を持った人も多い。
- 卸し小売りなどの生活産業の廃業は増えていく。事業承継の円滑なサポートは必要である。デジタルマーケティングの対応ができていないのであれば、支援産業があればいい。ベンチャービジネスを興すには、ベンチャーキャピタルがあった方がいい。支援産業自体がビジネスになりやすいのは、都市型産業の特徴である。世田谷であれば支援産業は成り立つ。世田谷にはシニア含めて、経験を持った人も多い。
- コロナに入る中で小売や飲食は蓄えがなく、そもそも疲弊していた。利益率が低かったりなど、全て取り残さずというところはあるが、中には峻別していく必要もある。一方、利益を上げて納税するようなところは手厚く支援していくべき。
- 多様性があった方が産業としてはうまくいくだろうし、核となるものがある方が成長していくんだろうなと思うが、あまねくやっぱり手は差し伸べなくちゃいけない部分もあるが、努力しない人にまで手厚くやる必要あるのか。
- 世田谷はいいところ。世田谷区で事業を行うことは全国的には意味のある事。世田谷ブランドは地域産業として魅力がある。
- 情報通信業は区内で増えている。分野が細かく、すそ野も広い。資本もほとんどいらないため、アイディア一本で創業もしやすければ、連携も取りやすい。流れが速いので、規模が大きくなると維持するのは難しいが。
- 産業支援ビジネスというのは、子育て、介護など広い意味で、可能性としてある。これまでは区や公社が支援をしてきたが、リソースが限定されていた。既存の事業者の数が多いので、支援をする人が集まる街になれば、その支援を求めて新たな事業者も集まるのではないか。
- 旧池尻中学校をリニューアルオープンするが、情報通信の専門家やコン

サルなどが常駐して、地場の事業者が集まるような場にしたいと思っている。

- 時代にあった転換をサポートすることは大事。人材や資金を投入してでも方法を提供することが大事。
- スタートアップではなく、スローな起業もあっていい。学ぶ機会とかいろんな人と出会えるとか、、地域でゆっく熟成し、育んでいくようなことが世田谷らしいのではないか。世田谷らしい起業や起業支援を明確に打ち出せると、世田谷で起業しようと思うようになる。
- 仕事とは言えないものみたいなものをどう評価するか。1 人 1 人が役割を持って生きるというウェルビーイングの観点も必要ではないか。ただ廃業を支援するというのではなく、店舗シェアといった地域資源をシェアしていくのも支援ビジネスになるのではないか。
- 社会や地域の中に役割を得られることは大事なこと。全ての人が身近なところにビジネスがあるというのが、世田谷のいいとこならば、接点がたくさんあることはいいこと。あいまいなグラデーションの中で支援や応援ができるとよい。
- 雇用とか起業ではない、業務委託などを含む多様なグラデーションをデザインしてうまくできないものか。
- 人材バンクのような仕組みがあるとよい。
- キャリア継続したいが、世帯収入や学費補助などを考慮し、自分が働かない方がいいだろうと思う人で、一方で、社会的活動は続けたいというような人が、やってる間は無償でやるが、何年後かにどこかに人材登録しておけば採用にすごくいい影響があるとか、お金で還元されるとか、社会的な信頼とか、スカウトに影響するなどの仕組みが構築できるといい。
- 支援機関の役割として、世田谷区産業振興公社について見直さなければならないのではないか。名前も変えた方がいいのではないか。自ずと機能も変わる。何が問題かというと機動性の問題ではないか。事業が固定してしまい、フレキシビリティが欠けていく。世田谷区産業振興公社は時代にあわせて変わっていく必要があるのでは。
- 新しい産業を起こしていく部分の役割は担っていない。セーフティネットや既存産業を支えるベーシックな仕事。新しい産業を支援するには機動性がない。あとは福利厚生と観光。福利厚生の世田谷独自のものは残しておく。観光は地域活性化の視点で再構築している。
- 廃業支援が必要。ソフトランディングにやめることが必要。
- 民間の産業支援ビジネスでできない、公社だからできる支援機能はセー

フティネットとかベーシックな部分というところに絞り込む。新しい分野も含めて網羅していくものではない。

- 職業紹介については、ハローワークはネットで全部やっているが、手作り的な丁寧なキャリアカウンセリングが必要なのではないか。仕事につけない人たちを支援する。
- 巨大な組織にする必要はなく、ベーシックな仕事をコツコツとやれる組織として残していけばいいのではないか。
- 産業支援については、区と公社で住み分けはできている。
- 新しいキャリアを作りたいということや挑戦的なことがセーフティネットの中に入ってしまうと、 新しいものをやろうとしてもできないことが出てしまう。
- フルタイム雇用で働くのが難しいから、支援かというとサポートは必要だが、セタカラーかというとそうでもない。そこがグラデーション。支援が必要そうに見えるが、新しいことをしたい、革新的にやりたいといったときに、価値に転換したり育んだりする支援が、今はまるところがない。
- 雇用保険や制度などの仕組みに合わせると、こぼれてしまうから、地域の中でそこを超えていく仕組みが必要では。国の制度だから仕方ないとなるともったいない。何かしら踏み込んだものがあった方が良い。
- 人材バンク的なマッチングの話はある。区として様々なセクター支援を行っていけるとは思うが、健康保険制度に縛られる。労働に対する賃金を数年後まで取っておくというのは難しいのではないか。
- お金じゃない形、地域通貨なのかもしれないし、そうじゃない形かもしれない。その期間を働き控えすることはもったいない。
- こういう働き方があるとか、この働き方したら生きていけるというようなことのイメージが湧いてないということがあるのではないか。こういう生き方をしてる人がいるとか、こういう形でも仕事が生まれているというようなことを知るというような、選択肢があることがアクションにつながる。大工さんになりたい子どもがいないみたいな話などは変えていけるポイントではないか。
- 日常の生活の中で、子どもがいろいろな活動をしている大人に会えるとか、そういうことが「目指す姿」としてあるのではないか。これらが、多様な働き方に繋がるにではないか。知れるきっかけがあるみたいなことができるとよいのではないか。
- 学童の隣にインキュベーション施設あるぐらいがちょうどいいのではないか。

- 子どもは普通の大人の普通の話が聞きたい。普通の大人の普通の話が実は自分にとってすごく良かった。日常の中に多様な人との出会いがあることは重要。
- 起業家を増やすために大人との接点を増やすというよりも、誰もが自己の個性や能力を発揮したいとか多様な働き方を実現していけるということに対して、これらがあるとよい。
- 起業家と記載しているところに、もう１つ箱を書いて多様な働き方に、繋がるというイメージか。
- 「多様な働き方を選択できる世田谷」というところに、いろんな働く人と出会えるというのがいいのではないか。
- 取組のところはブレイクダウンして、施策、予算、組織改正にも繋がるので、具体的に書くといい。
- 方針２だと実施主体はどこなのかも含めて書いていく。町内会や自治会など、そういうところも書けると面白い。産業振興や経済産業部の範囲を超えてしまうが面白い。
- 「日常の暮らしの中でいろんな大人に出会える世田谷」というのが目指す姿では。
- コワーキングがあって、子どももいて、畑があったりなど、いろんなことが、あるエリアで起きてるというようなことが見えてくると集積される感じになる。大学生が関わるとか、要素がいくつか重なると活性化する。
- いろんな人と出会える機会というようなものを、「街の〇〇拠点」としてネーミングして、取組をしていった方がよい。
- 企業によっては廃業をすすめることもあるが、引き継ぐとか、学生がチャレンジでやってみるとか、そういうのがあるとよい。
- 生活関連事業は事業承継と親和性がある。後継者を呼び込むような仕組みをやれると、地域として持続可能なのではないか。
- 国も事業承継の仕組みを作っているが、家族で事業をしているようなところは使わない。まずそういった人たちは制度を知らない。ある程度規模のある事業者でないと至らない。
- 小規模事業者に対する廃業の支援はセーフティネットの一環として必要ではないか。公社の役割。バンクを作るのも難しいだろうし、地域金融機関と世田谷版事業承継ネットワークのようなものを作っていくとよい。
- 支援施策へのアクセスができていない。公社と税理士協会などがうまく連携できるとよいのではないか。
- 廃業支援というようなことは今までは言いづらかったが、そろそろ必要

な段階かもしれない。

- 街としてのセーフティーネットとなれば政策的に介入する意義がある。
- 取組は練らないといけないが、今の段階では国の施策にアクセスできないとか、家計と経営が一体になっているので、切羽詰まったときに案件が出てくる。計画的に承継するとうまくいくが、それができない。
- 税理士や信用金庫など、様々なところから情報が取れるプラットフォームのようなものを作った方がいい。
- ある程度の規模のＭ＆Ａは民間がやるが、小規模になれば行政がしっかりやっていくべきではないか。データバンク作ったから解決する問題というよりは、ネットワークをうまく作ることが必要ではないか。
- 大田区では仲間回しの取組がある。世田谷も商業集積はあるため、商店街での情報の取り方やそれらの環境が問われるのでは。ネットワークのようなプラットフォームを作るときに、そのような団体を入れるということで、頭出しはできるのではないか。
- 農業は相続が続くと家が終わる。やる気のある若い人もいるので、残す仕組みができればいい。
- 有機農業とか無農薬野菜を学校給食に、使いたいという話があったが、量が必要。野菜工場のようなものを場所が空いているのであればできないか。
- エシカルな消費部分で、エシカル生産というか、消費だけではなく一体として議論していく必要があるのではないか。
- 農業や工業を産業としてどう捉えるかは、１度、向き合った方がいい。世田谷に工業地帯を残すことにメリットはあるのか。世田谷育ちの消費を増やすことにも意味があるのか。農業はコミュニティ醸成の場ではないか。農業を地域のコミュニティ醸成に重要なものとして位置付けられないか。
- 工業や農業が世田谷にある意義は、それを頑張って元気にしようということより、人材育成の場などになっていたりすることが世田谷らしい工業ではないか。
- ４－２のところは世工振の目線になっており、住民とのトラブルを起こしたくないから環境の調和を図りたいという話は説得性がない。なぜ住民交流をしなければならないのか。そこが書かれていない。交流の目的を明記した方がよい。
- 子供と教育は世田谷では計画の真ん中にあるので、産業部門と連関させるのはよい。
- 農業や工業がコミュニティの起点になるというのは良いが、キュレータ

ーがいないと難しい。地域の新しいコーディネーターの人材像はこれまでも議論してきたが明らかになっていない。グラデーションをうまく繋いだり、うまく繋がってないところに意味を持たせてくれたり、世田谷にある全ての現場を学びの場としてキュレーションしたり、プランニングに助成金出すとかというのがあるのではないか。

- 街全体で学びができる地域になるというのはいい。一方、従来の専門家だけでなく、センスのある事業者とか、仕立ててくれる人たち、あいまいなところを繋げる人が街に増えて役割を担うなどが必要。
- 世工振とか農協などの産業団体の中に受入体制があったらいいが難しいだろう。それらを繋げる産業連関的なコーディネーターがあるとよい。
- リビングラボ的なもの。関わりを持ちたい人たちが入り、こういうことがあったらいいという意見がそこで拾われて、事業者にフィードバックされてもいい。
- 街中のリビングラボと言ったらまちづくりセンターの範囲で１つは欲しい。または、公民館や児童館など、区の施設を活用するのがよいのではないか。
- オープンファクトリー。墨田区や大田区は住工混在エリアだが、世田谷はきっちり分けており混在エリアではない。それが世田谷の住みやすさではある。世田谷は工業が日常の中にあるのではなく、非日常の中にある。桜新町のような工業団地にはわざわざ行かない。
- 世田谷の工業で残っているのは一芸を持っている。視察をしたい場合も１か所２人程度。日常的に見学に行くというのはない。
- ビジネスモデルを転換をし、年間を通じて区内の中高生が社会科見学に行くというサイクルも作ると、それは１つのビジネスになりそうではないか。
- リビングラボやシビックプライドなど、街の中で自分ごとが増えると、環境に優しい行動とるというようなことと近しいのではないか。４－１はリビングラボや「まちを自分ごと化して取り組める世田谷」というようなことがあってもいいのではないか。
- ウェルビーイングというようなキーワードがない。 それを入れれば、リビングラボなどの話も入ってくる。目指す姿が一番上にもう一つあるのではないか。
- 立場や所属、世代を超えてコミュニティができるというのが、ウェルビーイングの１つの要素ではないか。世田谷のスポーツチームをみんなで応援し、街の人たちと盛り上がれたら、繋がりができ、地域経済も盛り上がる。

- ４－４に入れたらいい。戦略のところの賑わいの話の中にスポーツや文化が入ってるが、ここはただの賑わいではなく、住民のウェルビーイングに繋がる話であるため、混在する形になっているのではないか。これらを最後に持ってくるとよい。
- 取組のところにリビングラボ的なことやスポーツコミュニティとか音楽コミュニティとか、文化芸術に関するコミュニティがあるので書いたらよい。
- 施策は宿題としてまとめたほうがいい。
- 企業はビジネスで成長したいという人とソーシャルな部分は分かれていない。世田谷の特徴は世の中に貢献したい人たちが多いのではないか。地域経済の後押しをしていると、結果、ソーシャルビジネスの推進にも繋がる。
- 世田谷らしいソーシャルビジネスの分野のスタートアップ。世田谷の多様性や多様な住民ニーズ、実験の場としてよかったから出てきたという話がありうる。
- アクセルレーターみたいな仕組みは別に作らないといけない。
- ソーシャルビジネスを始めるときに、そういう支援が受けられるとか、インパクト測定時にアカデミックの裏付けが取れるような調査が設計できるとかが重要。ソーシャルビジネスの取組の可視化。
- 成長していく時にインパクトをどうやって示せるかや、世田谷の中での評価がされていったり、区の政策に反映されていくことは重要。
- 自分たちがやってることの意味がなんなのかというような話が気軽にできて、指標についての議論や共同研究ができたらコレクティブのものになっていく。
- ソーシャルインパクト指標は、だんだんウェルビーイング指標に包含されていく形になってきているので、活用するということを明記してもいいかもしれない。
- ソーシャルビジネスを立ち上げるための資本をどう届けるのかということについて、今までその部分がなかったから回りにくい面があった。ファンド的なものとか地域限定ＶＣのようなところまで踏み込んで記述があると、それをベースに外のプレイヤーも引っ張ってきて議論すると進むのでは。
- 信金としては、キャピタル的なことは色々やりたい。貸し出しだけでなく、地域の産業を育てるために、そういうのがあるとやりやすい。小口で社会貢献として。立て付けがあれば参加しやすい。
- 世田谷の産業も連携して、寄付を集めていくなどソーシャルビジネスに

区民や既存産業の人たちの接点も作っていけるとよい。

- ソーシャルビジネスの戦術のところにファンドを具体的に書くとよいのではないか。仕組みは慎重に考える必要がある。個別の企業とかビジネスに対してのファンドはないので、そういったところに資金供給していけるとよい。
- 株式でやるにしても東証上場というのは難しい。世田谷ぐらいで上場できるような株主コミュニティみたいな制度を作らないと、株式でリターンを得るのは難しい。
- SDGs 債とか SDGs 宣言してると、利回りが低くても買う。
- 利回りを確保する道が難しい。4 桁以上のお金を出すとなるとリターンを確実に取るのは難しい。
- 取組の欄には検討をするというような文言を書くでいいのではないか。

以上